

社会的現実研究における「変」という感覚の効用 ：無意識と意識、集合と個人の接点として^(注1)

石 井 徹*

About the feeling of anomaly as an index of consciousness
in the study of social reality.

Tooru ISHII

要 約

本稿では、まず昨今の社会的現実を巡る諸研究を概観しつつ、この現象が我々の意識と無意識にまたがる興味深い現象であることを明らかにした。他方、我々の意識と無意識に関する昨今の研究結果に基づき、両者の境界に「変」という感覚を位置づけた。次にこれらを統合して、社会的現実の研究に「変」という感覚を導入することの理論的妥当性と意義を検討した。加えて社会的現実の存在や変化を見分ける指標として、この感覚の方法論的有効性を検討した。

キーワード：社会的現実、意識と無意識、「変」という感覚、常識、感覚の社会性

abstract

In this study, we made it clear first that social reality is one of the phenomena which extend over our consciousness and non consciousness, surveying the recent researches about social reality. And then, on the basis of the research results of these days regarding our consciousness and non consciousness, the feeling which is referred to “anomaly” was located to the boundary of both states as a hint of awareness. Integrating these next, we examined the theoretical propriety and meaning of bringing the feeling of anomaly in the research of social reality. In addition, methodological effectiveness of the feeling was examined as an index which distinguishes the existence and change of social reality.

keywords social reality, consciousness and non consciousness, the feeling of anomaly,
common sense, social nature of feeling

社会的現実とは social reality の訳語であり、社会的実在と呼ばれることもある。主に過去四半世紀にわたって、我々の社会を考える格好

の現象として社会学や社会心理学の関心を集めてきた。しかしそこに含まれる現象や対象の多さもあって、貴重な知見やその定義が、

*島根大学法文学部

^(注1) 本稿は2006年度後期「人間情報行動論C」の講義録をもとに、加筆訂正したものです。引用文献は原則として邦訳のある本学所蔵のものを心がけました。

検討する視点も未整理のまま多岐にわたっているように見える。本稿では、昨今再び注目され認識が新たにされている無意識との関連に焦点を当て、これを再度検討する。従来の社会心理学においてたびたび議論されてきた集団と個人、あるいは集合と個人の接点が、社会的現実の維持と形成に果たす無意識の役割を探る中に、「変」という感覚を手がかりとしていっそう明確に見いだされると考えるからである。

社会的現実

社会的現実とは、常識や規範などの社会的に共有された行為、出来事、振る舞い、規則、価値観等の総称である。流行のように相対的に短期間に起こって消える現象ではなく、比較的長期にわたる安定した物事や現象を指す。具体的、物理的な存在を指すこともあるが、それ以上に、それらに付与された社会的な機能や用途、性質を指すことが多い。例えば、衣服は特定の形に裁断され縫製された布切れではなく、身にまとうものである。特に外出時には必ず身につける。逆に身につけなくなったものは「思い出」や「タンスの肥やし」になり、極端な場合には「雑巾」にもなる。衣服に付随する靴下など対になったものについては「必ずお揃いにする」などの暗黙の規範もある。これらの規範の拘束力は思いの外強く（石井、未発表データ）、社会的現実の安定性（＝変化への抵抗の強さ）を示すものと理解できる。

多くの社会的現実とは、特別な動機や事情、あるいは指摘がない限り、自覚しないことが多い。その内容はふつうのこと、当たり前のこととして認識されている。普段自覚しておらずその故に言語化もしないことから、一方では、自覚し敢えて言語化する際には大

きな困難を伴う。また他方では同じ理由によって、異なる集団からの転入者にとってもっともわかりにくいことがらとなる。

社会的現実とは、元来、その社会の構成員の合意に基づいて作られ維持され、あるいは変更されてきた。すなわちもともと想定上のものが圧倒的に多いにもかかわらず、どれも、それが実在するかのような現実感（現実味）を帯びている。先の例を続ければ、衣服を単なる布きれのかたまりと見なすことの方が努力を要するであろう。実在するのは布きれにもかかわらず、そこに「衣服」という機能が実在すると認める認知過程については、逆に、まさに架空のものや物理的には存在しないものを例として池田（1993）が詳細な検討を行った。

また Prentice & Miller（1993）はキャンパスでの飲酒に対する態度調査を行う中で、多くの学生が「自分はそうではないが、飲酒は人を心地よく愉快にさせる。したがってむやみに禁止するのはよくない」と思っていることを明らかにした。ポイントは「自分はそうではないが」という点である。多くの学生が、自分はさほど心地よくないと思っている。それにもかかわらず飲酒に賛成しているのは「自分は少数派であり、大多数は心地よいものだ」という思いこみからである。「自分はそうでもないけれど、周りが心地よさそうにしているから、自分もそれに合わせて心地よさそうにしなければ」という思いと行動が、まずまず飲酒に対するお互いの思いこみを強化してゆくことになる。Prentice ら（1993）の調査がなければ、実体とは異なった思いこみによってキャンパスでの飲酒が認められてゆくことになったであろう。Prentice ら（1993）はこのような思いこみを pluralistic ignorance（「多元的無知」あるいは「みんなの

無知」）と呼んだが、社会的現実の中で実体を伴わないにもかかわらずきわめて現実的で、それ故我々を強く拘束しているものの好例となろう。ただこの例のように、特定の社会的現実について実体との関係が明らかになることはまれであり、通常我々の周りでは、実体を伴うかどうか不明確なまま多くの社会的現実が日常生活を拘束し、他方同時に安定させている（石井、2005）。

さらに社会的な対象だけではなく、心理学の歴史を少し振り返ってみれば、主観的輪郭線や奥行き知覚などの豊富な事例に明らかのように、しかるべき刺激付置が与えられれば、我々は実在しないものであってもその存在を容易に認める、すなわち現実感を感じるようになる。このことは単に個人の認知の問題にとどまらず、例えば我々がコミュニケーションを行う際に、この現実感を基礎として様々な社会的現実が「共有された暗黙の前提」（池田、2000）となる。

また社会的現実とは「常識」という呼び名のもとに、社会の安定を支える「信頼」の基礎になる（Garfinkel, 1963）。Garfinkel（1963）に記された「常識崩し」の報告の一つには、自宅で礼儀正しい下宿人のように振る舞った学生が、家族に少なからぬ混乱を起こした様子が記されている。「家族らしさ」という常識を「礼儀正しい下宿人らしさ」に置き換えたことによる混乱であり、個々の振る舞いの善し悪しではなく、状況への相応しさが問われた例である。たとえ無礼な振る舞いであっても、家族の前での振る舞いとしてふさわしい振る舞い方であれば、下宿人として社交上非の打ち所のない振るまいよりも家族が感じる当惑は少ない。家族とそうでないものを見分ける「家族らしさ」という常識は、他の常識と同じく、とても言語化しにくいまま、多く

の場合暗黙のうちに、どの社会のどの家族にも存在してきた。それが当事者たちの意識や口の端に上るのは、よきにつけ悪しきにつけ何か特別な問題が起こったときである。

すなわち、社会的現実を検討する際には、人がそれを自覚する（あるいは自覚している）場合としない場合の双方を視野に入れて検討を進めなければならない。このことは社会的現実に限らず、これまでも態度や帰属、同調など社会心理学の様々な領域でおりにふれさやかれてきたことではあるが、いくつかの事情からできないまま今日にいたってきた。

その事情の一つが無意識の曖昧さに基づく概念上、そして操作上の難しさである。例えば、私自身がつゆほども感じた覚えのない好き嫌いにしたがって行動している、という事態をどう捉えたらよいだろうか。Wilson（2002）も述べているように、例えば実験心理学の領域では、無意識を話題にするときはこれまで誰もが声を小さくしてきた。

それでも幸運なことに、昨今、主に認知心理学や脳生理学などの無意識を実験的に扱う領域からの知見によって、無意識に対する旧来の認識があらたまってきており、これによって社会的現実の理解も進むことになった。先の問いに対しても Gregg, Seibt, & Banaji（2006）は意識下の、すなわち無意識の好き嫌いが存在し、行動に影響していることを刺激語に対する反応時間を指標として示した。本稿は、一つには、Gregg ら（2006）が示した好き嫌い（preference）に対する知見を社会的現実にも拡張して検証するための一環として記すものである。

一方、これまで社会心理学では態度や集団規範などの名の下に、また社会学では例えば常識という名の下に、今日社会的現実に含まれることになる対象を研究してきたが、1980

年代頃からこの呼称のもとにこれまでの知見が整理、統合されつつある。この経緯については本稿の主旨から逸れることになるため、解説を別の機会に委ねることにして、本稿ではここで、もう一つの柱である意識と無意識に対する認識の変化に議論を移すことにする。

無意識

Wilson (2002) は「人間の心の大部分は無意識だという考えは、フロイトの偉大な洞察」だという (訳書 p.5,14.)。これに異を唱える心理学者はわずかであろう。しかしその内容については、Wilson (2002) や Nørretranders (1998)、そして池上 (2001) が紹介するように、フロイト以前から今日に至るまで様々なモデルや考え方が提唱されてきた。

フロイト以前の無意識について、Wilson (2002) はウィリアム・ハミルトン (心的潜在)、トーマス・ライコック (脳の反射活動)、ウィリアム・カーペンター (無意識的精神活動) の名前を挙げる。Wilson (2002) に詳しく述べられているように、19 世紀末の当時、これらの理論はデカルトの二元論の影響の下に広く受け入れられることはなかった。しかしその内容は、今日 Wilson (2002) が「適応的無意識」と呼ぶものにきわめて近いものであった。

フロイトの無意識として今日知られているモデルは、フロイト自身が変更を加えたこともあって概観するのは容易ではない。本稿ではまず、池上 (2001) が示す要約を中心に議論を進める。池上 (2001) の要約は以下に示すとおり、本稿の視点に照らして、もっとも簡潔でわかりやすく、公平で、なおかつ的を射たものと考えられるからである。すなわち、「人間の深層には容易に意識化できない記憶や欲求が潜んでおり、それらが個人の意識や行動

を支配している (p.130, 1.15-16)」。さらに「無意識は、非合理で異常なものと見なされ、さまざまな不適応症状の源泉になっていると考えられた (p.130,1.16- p.131,1.2)」というのがその要約である。当然のことながら、この要約の中で前半の件は、今日の無意識モデルにおいても重要な要素であるが、中盤の支配を巡る件は今後研究の如何によっては興味深い展開を期待できそうな部分であり、後半部の非合理性や不適応症状の源という部分に至っては、否定はされないものの、その比重はかつてに比較してきわめて小さくなっている。

すなわち昨今の無意識モデルでは、無意識は我々が日常生活に支障なく適応してゆくために必要不可欠な多くの並列モジュールから成り立っているよくできたシステム (Wilson, 2002) であり、自覚できる統制システムと補完しながら、自覚できないレベルで自動的に働いている (池上, 2001) ことになっている。またこの見解を支持する大脳生理学からの知見も、それが巻き起こした論争の影響と共に明らかになっている (Nørretranders, 1998)。

池上 (2001) は、主に 1970 年代後半から 2000 年頃までの研究を概観する中で、認知心理学の影響によって社会心理学にも、意識レベルでの情報処理過程 (統制的過程) と無意識レベルでの情報処理過程 (自動的過程) の二つの過程が認められるようになってきた経緯を紹介した。対人認知、社会的推論、態度、偏見やステレオタイプの研究分野で見いだされた知見は、池上 (2001) の言うとおり、社会心理学においても二過程理論が有効であることを示している。意識的な統制過程を重視してきた社会心理学における無意識的な自動処理過程へのこのような視点の広がりを、池上 (2001) は「オートマティシティ革命」と

呼び、知覚・認知の自動性 (オートマティシティ)、評価・感情の自動性、目標・動機の自動性に分けて詳しく紹介し、さらにこれら 3 つが並列処理システムと考えられることを紹介した。この後も、意識の役割や無意識との連携モデルについて精力的な紹介が続くが、これらの項については著者自らが述べているように、今後探求されるべき課題もまだ多く、その展開に伴ってさらに興味深いモデルが期待できると思われる。

人を精巧な情報処理システムと見る視点から、どちらかといえば静的なシステムとして無意識を概観する池上 (2001) と同じく、Wilson (2002) もコンピュータの基本であるオペレーティング・システム (OS) のようなイメージで無意識とそして意識を描き出す。しかし「適応的無意識」という名に明らかなように、このモデルには、環境への適応という動的で合目的な視点が従来のモデルよりもやや強く込められている。

表 1 適応的無意識 対 意識

適応的無意識	意識
多重システム	単一システム
オンラインのパターン検出器	事後的な事実点検器
「今ここ」の即時的視点	長期的な視点
自動的処理 (速い、非意図的、統制困難、努力を要しない)	統制的処理 (遅い、意図的、統制可能、努力を要する)
融通が利かない	柔軟
早とちり	ゆっくり展開
否定的情報に敏感	肯定的情報に敏感

(Wilson (2002) をもとに石井が改変)

表 1 は、Wilson (2002) が、意識との対比において「適応的無意識」の特徴を列挙したも

のである (訳書 p.67 より石井が一部改変)。表の第 1 行にあるように、少なくとも現時点において意識が単一システムと考えられるのに対して、Wilson (2002) は、無意識は並列処理可能な複数のモジュールからできあがっている多重システムだと考える。「適応的無意識はたくさんの独立した能力の集合体である (訳書 p.66,1.15)」という著者の言葉どおり、まさにコンピュータの OS である。さらにこの考え方は、すでに 1930 年代、ワイルダーとペンフィールドの研究グループが見いだした大脳皮質の脳地図に表される分業体制と、少なくとも心を考える方向性において一致している。

Wilson (2002) によれば、血液の流れを司るモジュールや呼吸を司るモジュール、新陳代謝を司るモジュールなどをはじめとして、感覚器に入ってくる 1 秒間におよそ千百万要素の刺激の中から最大 40 要素を自覚させ、残りを意識の外で処理、利用するためのモジュールなど、数えきれない数のモジュールが並行して、私たちが環境へ支障なく適応するのを達成している。「これは心が高度に効率的であるために必要な、心の拡張された部分であり、心という一家の要求の多い子どもでもないし、またこの子どもを手なずけるために発達した防衛機制でもない (訳書 p.8,1.16- p.9,1.1.)」。文字通り膨大な数の「縁の下の力持ち」であり、きわめてよく発達したインフラストラクチャと言える。

しかもこのような無意識が、意識に従属してそれを補佐するのではなく、むしろ逆に、意識に優先して我々の思考や行為を決定したり実行したりしていることを示す実験結果が提出された。次に、次第に明らかになる無意識像から逆に見えてくる意識の像を検討しながら、この結果が意味するものを考える。

Wilson (2002) も紹介するように、デカルト

が「我思う故に我あり」と言ったとき、我々の心は自覚できるものすべてだった。この言葉が、心や「私」を自覚できる範囲に閉じておいてしまったことに気づいた人たちもいたが、時代の流れの中で大きな声にはならなかった。続いてフロイトが、不合理や不条理の押し入れとして無意識という自覚できない領域を付け加えたときも、意識は「(心という) 氷山の一角」と位置づけられた。しかし今日、例えば Wilson (2002) は「氷山の上の雪玉に近い(訳書 p.8, l.13)」と言う。デンマークの科学ジャーナリスト、トール・ノーレトランダーシュ (Tor Nørretranders) は、ベンジャミン・リベットの脳生理学実験を巡る論争を紹介する中で、もっと過激に、意識は我々の錯覚 (ユーザー・イリュージョン) だと言った (Nørretranders, 1998)。

Nørretranders (1998) によれば、アメリカの神経生理学者ベンジャミン・リベットが行った一連の実験は、脳生理学あるいは解剖学の立場から、自覚できない精神の世界すなわち無意識の存在を示すものになった。それまで経験的あるいは臨床的、そして理論的に提案されていたことがらに解剖学的な証拠が提出されたのである。最近では、心理学実験による証拠がこれに追加されつつあるのは、先に紹介したとおりである。

高校の生物で習ったとおり我々の神経細胞は、細胞内では化学的变化によって、細胞間では電気的变化によって、刺激を伝達する。

この電気的变化はしかるべき箇所にセットされた電極や脳波計測器を用いることによって、生体の外から観察することができ、我々の精神活動は、このような細胞の電気的变化、特に脳の電気的变化を観察することによっても推測できる。ベンジャミン・リベットがドイツの神経生理学者ハンス・H・コルンフーバーとリュウダー・デーッケによる発見をもとに見いだした知見を以下 Nørretranders (1998) に従って要約する。

コルンフーバーとデーッケは EEG (脳波記録法) を用いて、手や足を動かすといった単純な動作に先立って脳内に電気的な活動が現れることを見だし、この特徴的な電位の変化を「準備電位」と名付けた。動作の実行に先立って脳は準備している。Nørretranders (1998) も言うとおりの、このこと自体には何の問題もない。しかし準備電位が現れるタイミングに疑問を持ったリベットは、「ヴントの複雑時計」などの工夫を凝らして、実験協力者が行為を (自覚的に) 決意したタイミングと、実際に行為を行ったタイミング、そして準備電位が発生したタイミングの3種類のデータを手に入れた。これら3種は、同様の実験を何度繰り返しても、準備電位、実験協力者の (自覚的) 決意、実際の行為の順になった (図1参照)。

もっとも直接的には、脳外科に入院していた患者の同意を得て主治医立ち会いのもと、頭蓋骨を取りのけた脳に直接電気刺激を与え、

ちゃんと意識のある患者の反応を得るという実験まで行った末、やはり準備電位が決意の自覚に先立って現れること、しかも平均して0.5秒も早く現れることをリベットたちは見いだした。刺激を受けた部位から該当する脳の部位まで、神経が刺激を伝達する速度を皮膚刺激によって求めた結果が平均0.02秒であったことを考え合わせると、0.5秒はとても長い時間である。

私たちの脳は、私たちが「小指の先を動かすぞ」と思う0.5秒も前から、その準備を始めている。本人が思いつく (自覚する) 前にどうやって、いつそのことを知ったのだろうか、そもそも指先の動きを「何が」決めたのか、と多くの科学者や哲学者が悩むことになった。意識している「私」が私のすべてだ、あるいは自覚している「私」が私のすべてだ、無意識の部分があるとしてもそれを統制 (コントロール) している主体は意識している「私」だ、という視点からではどう説明できない現象である。

リベットと共同研究者たちはこの後も実験を重ねる中で、刺激が微弱な場合には脳が皮膚への刺激に気づいても意識はそれに気づかないこともあること、その場合、気づくためには0.5秒の持続が必要なこと、さらにはその時意識された内容は0.5秒をさかのぼった内容に「編集」されている (時間の繰り上げ) ことを見いだした。Nørretranders (1998) はこの結果をふまえて、意識は「ユーザー・イリュージョン (利用者の錯覚)」だと言う。

ユーザー・イリュージョンは元来コンピュータ用語で、利用者の便宜を図るために、コンピュータの行う動作のうち、利用者に関わり深いもので、利用者にはわかりやすいものを、利用者にはわかるように模式化したイメージを指す。それは、コンピュータの動作をすべて

表してはいないし、表しているものがすべて実際のとおりとも限らない。例えば「コンピュータが画面に図や字を書く」という表現 (イメージ) は、利用に支障がない限り許され、広く認められている。このときコンピュータは液晶画面の上にキー入力で指示されたとおりの光パターンを明滅させているにすぎない。またその背後でどれだけの1と0の繰り返しが何度処理されているか、利用者は知りようがないし、知らなかったとしてもその環境に適応する上で何の問題も生じない。このときコンピュータの側も明滅させている光パターンの「意味」を「理解」していないし、そのことが何かの問題を引き起こすこともない。「意味」はあくまでも利用者が与える「錯覚」である。さらにこのようなユーザー・イリュージョンが表すコンピュータの動作は全体から見るとそのごく一部にすぎないのに、我々はそれがすべてで、かつすべて実在するかのよう思いこんでいる。

意識に対する Nørretranders (1998) のこのような見解には、緻密な根拠の積み上げや議論展開の周到さに圧倒されて、つい説得されてしまう。特に興味深いのはこのような考え方が、仏教の「般若心経」が説く「色即是空」という世界観に通じていると思われる点である。過激な内容でありながら日常的な感覚から首肯できる場所も少なからずあるのは、このような文化的背景の影響もあるのかもしれない。しかしここは今少し、一部分を直ちに全体と見なすことに慎重でありたい。本稿では Wilson (2002) に従って、「(意識は) 少なくとも部分的には幻想 (訳書 p.65, l.1-2)」だという立場で議論を進めることにする。

と言うのも、フロイトの描いたものと異なる無意識 (的機能) が実証的に見いだされてきたのは過去およそ30年から40年であり、想

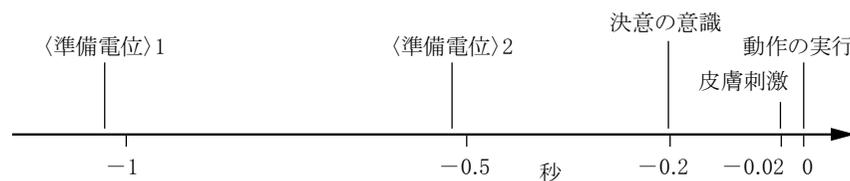


図1 リベットの実験結果 (「ユーザーイリュージョン」より石井が改変)

定される無意識の広がりには比べるとまだわずかな領域しか明らかになっておらず、しかも飛び地的な地図が見えてきた段階だと思われるからである。無意識に関してはその限界が見えないこともあって広さを過大評価しているかもしれない。上に述べたように意識の位置づけも再考される今、両者を含めた「心」の見取り図は、以前よりも明確になった反面、視野の広がりによってこれまで以上に混沌としてきたようにも見える。

今日、少なくとも心理学的に無意識を考えようとする際、衝動的、本能的、自然のまま、という形容を連想する人はほとんどいないと思われる。あるいは「獣のような」という形容は、逆に動物行動学からの「動物は、人間が考えるほど野蛮でも無計画でも無軌道でも、あるいは無慈悲でもない」という叱責を被るであろう（例えばFox, 1974; Lorenz, 1960）。また抑圧的、不合理、不条理という形容は、上に述べたように、非社会的（反社会的）という形容と共にその比重がとても軽くなってきた。したがって無意識に関して検討すべき見かけ上の特質は、主に、自動的、無意図的、無自覚的の3つが残ることになる。

これらは上に紹介した3組のモデルやその紹介に共通した特質だが、それぞれの視点がかける比重に微妙な違いがあった。二過程理論（池上、2001）では自動的という点に比重がかかっていた。その対語として統制的という形容が挙げられているが、意図による統制であるにもかかわらず意図的—無意図的という図式を選ばなかったことは、擬人的要素をさげ、より情報理論的な視点から検討しようとしていることを物語る。これに比べてWilson（2002）では、表1に示されるように数ある特徴の一つとして、両者にいっそう均等に比重がかけられていた。他方リベットの一連の実

験では無自覚的—自覚的という無自覚性が焦点であったが、それを受けたNørretranders（1998）では無意図性が正面に押し出された。

このような違いが起こるのは、自覚できる意図（意識）が明確であるためであり、無意識をその余事象としてとらえていることが原因と考えられる。明確な「であるもの」の余事象としての「でないもの」は、前者が明確であればあるほどその否定形としてあらゆる可能性を含むことになり、注目する箇所によって様々な「でないもの」が描かれることになる。つまりそこで展開される諸議論は、一つの事実の異なる相を表したものであり、見かけ上の相違を克服した後、互いに補完的な位置づけで今後よりよい統一が目指されるべきものとして考えられなければならない。

このような議論の一環として、本稿では自覚の有無を重視する視点から、社会的現実と無意識の関連を検討する。社会的現実との関連を探ることについては、無意識を考える立場からは次のような効果が期待できる。

すなわち上記の紹介やモデルに共通したもう一つの視点として、あくまでも個人のシステムとして無意識あるいは意識を論じていることが挙げられる。しかし例えばWilson（2002）に示されるように、その内容には社会的な要素や周界との相互作用によって形成や変更がおこるとされる要素が含まれる。これは意識と無意識からなる我々の心が、それ独自で存在しうる「自律閉鎖系」ではなく、我々の肉体と同様、周界との相互影響過程の中でその相対的存在を保つ「開放系」であることを示している。この意味において、意識と無意識をその周界との関連において考えることは不可欠な作業であり、特に機能的な輪郭を描く上で有効な示唆を与えると考える。以下、社会的現実に対して多くの場合無自覚

であるという状況を確認しつつ、社会的現実が個人のシステムに無自覚化してゆく過程と、逆に自覚化する過程へと考察を進める。

社会的現実と無意識

社会的現実が興味深いのは、一つには、それが一方ではあくまでも個人の認識の上に存在するものでありながら、他方同時に社会的に広くその「实在」が認められていることにある。例えば多くの日本人にとって「米」はご飯のもとであり、「野菜」だと言われることに違和感を持つ人は多いと思われる。「お米のサラダ」などの、日本の文化以外の地域では当然のメニューが、日本では「変なもの」扱いを受けることになる。「米」という植物はあるにせよ、その社会的意味は日本では「ご飯のもと」であり、他の野菜とは一線を画して長い間「お米屋さん」で売られてきた。今日その販売形態に変化が見られるものの、「米」に対するこのような認識は、まだ多くの人が持っている思いであり、その持ち方も私的に持っているだけでなく、共通のものという認識と共に持っている思いであろう。

このように、個人の認識上の私的な存在が、同時に、社会に広く共有されるという公的性格を有することについて、社会学では間主観性を仮定することによって常識という「装置」を見いだした（Schutz, 1945）。そしてこの装置が逆に我々の認識や行動を、多くの場合無自覚のうちに左右していることをGarfinkel（1963）は指摘する。この間の経緯については、言語の成り立ちや影響についても同様の図式を見いだすことができよう。ここでいう間主観性とは、乱暴とのそしりを覚悟で煎じ詰めれば、合意と言いうる。当然のことなが

らこの合意は、それを守ることに対する相互期待を含んでいる。

さらに先のNørretranders（1998）に従って我々の意識をユーザー・イリュージョン、すなわち錯覚と考えるならば、常識はその意識の内容をいっそうリアルにするために、すなわち実在性あるいはリアリティをより強固にするために、間主観性（合意）を手がかりとして、我々が長い時間をかけて練り上げた産物であり、集団的錯覚のかたまりということになる。やっかいなのはその錯覚が、一方で規範として我々の思考や価値観、行動を縛り、他方同時にその束縛によって社会の安定を支えている（石井、2005）ことである。

このような社会的現実、当然のことながら、我々が生まれながら携えていたとは思えない。数え切れない社会的現実を後天的に獲得してきた過程は、様々な学習過程を通して、おかれた環境に懸命に適応してきた過程である。個々の学習過程に焦点を絞れば、例えば自転車乗りにも典型的に見られるように、それは無意識化の過程と言えよう。個々の細かい手順を意識しなくなったとき初めて「うまく乗れた」となる。技能的な事象のみならず、思考パターンや価値観などについても、例えば「この町の人らしくなった」という周界の感想は、本人が「この町」を自覚しなくなったときに初めて聞くことができる。潜在学習や観察学習、あるいは洞察学習といった特に強制されない学習過程であれ、条件付けに典型的に見られる周界の意図が明確な学習過程であれ、人の場合その学習の完成は、武道から日常の道徳、食事のマナーに関する社会的学習まで、無意識化が一つの基準であり目安にもなってきた^(注2)。

(注2) 自覚しない意図を巡る検討は、論旨の混乱を避けるために、本稿では回避しました。

また次に、無意識化される内容について、学習をする側とさせる側の配置を考えておかなければならない。二組の人あるいは集団のうち、どちらが学習をする側になり、どちらが学習させる側になるかについては、政治的要因や人口学的要因、さらには経済的要因など様々な要因の影響が考えられる。一般的には、各要因に関して、あるいはその合成結果に関して劣位にいる者たちが学習する側になり、優位の者の有する諸特性を学習することになる。具体的には赤ちゃんの場合はもちろんのこと、新入生や新入社員の場合も、新人はほとんどの場合少数派、あるいは劣位に甘んじることになる。したがって学習する側になり、各時点、各場所において優勢となっている側、優位に立っている側の価値観や思考パターン、行動様式を学習することになる。歴史的イベントなどによって新人が多数派となり、相対的優勢の中で自分たちの考え方を周囲に説いてゆく事例は、例えば「団塊の世代」などと呼ばれてニュースになる。まれな事例であることの証明と云う。つまりほとんどの場合、既成の社会的現実が保存あるいは維持される条件が、基本的に整っていることがわかる。学習する側から見れば明らかに環境への適応過程 (Wilson, 2002) であり、外的環境である社会的現実を自らの無意識のうちに社会のひな形として再構成してゆく過程と云う。

ちなみにこのひな形は完成することではなく、周界のチェックと矯正を日々受けている。あからさまな指示はまれであり暗黙の指示の場合が多いが、周界の指示に従わない場合にはまず「変人」扱いされ、極端な場合には様々な合理的理由によって当該社会から排除されることにもなる。その際、多くの場合、排除の「合理的な理由」にも多くの社会的現実が

含まれていることに注意しておきたい。同じ社会的現実を共有しないものから見れば、どこまでも不合理な理由であり、不合理な処置に見える場面である。逆に、傍目にはどんなに不合理に見える行動であっても、社会的現実が共有できている者同士の中であれば、「合理的」である可能性も大いに存在する。

このように無意識化の過程については、これまで蓄積された学習心理学の知見に多くを頼ることができそうである。しかし、無意識の処理過程における結果が意識化される際の過程については、土台となるべき知見がまだ十分に体系化されていないことから、無意識化の過程と同じくらい明確な像を描くのは、現時点では困難である。本稿では「変」という日常的な感覚を手がかりとして、意識化の過程の一端を探る。この感覚が起こる過程は、最終的な位置づけは未知であるものの、少なくとも意識化の過程の一部には含まれると考える。

「変」という感覚

我々は普段ふつうのものごとに目を留めることはほとんどない。通いなれた道端の草木の生長などのように、日々変化してはいても、変化と認知しなければ我々は気にもせず、話題にもしない。すなわち、我々の目をひくのはどこか変なものごとである。さらに知覚と判断の順序から考えて、変と自覚する前に我々の耳目はすでにそれを捕らえていなければならない。したがって「変」と自覚した時我々がおこなっているのは本当に変かどうかの確認である。無意識に対する Nørretranders (1998) や Wilson (2002) の論考はこれらの想定を支持している。そして、改めてよく見て変じゃないと判断すれば、あるいは許容範囲の変であれば、我々はその瞬間にそのものご

とを忘れる。路傍で光ったものがピンのふただとわかった瞬間、我々はそのことを忘れる。

他方、確認の結果変となればその後の反応は、接近と回避の二つに分かれる。その変なものが我々の目に好意的に映るとき、それは話題になり、流行にもなる。逆に我々は多くの変について回避反応を示す。「変なやつ」、「変なことしないで」など日常的に使う言葉に含まれる否定的な意味合いがこれを裏付ける。

先にも述べたように、Wilson (2002) は、意識が肯定的情報に敏感なのに対して、適応的無意識は否定的情報に敏感だという (表1参照)。LeDoux (1996) も我々には非意識的な「危険検出器」が備わっており、危険と判断したときには恐怖反応を引き起こすと言う。これらは本稿がここで検討する「変」という感覚の一部分をなすと考えることができよう。

すなわち、環境への適応という観点からは、否定的情報は生命に関わることが多く、したがって恐怖反応とも結びついており、肯定的情報に対してよりもいっそう敏感であることは確かに望ましい。

しかし我々の進化における初期において、つまりこのシステムあるいはモジュールの発生段階においてはそうであったとしても、その機能が今日までそのまま限定され続ける必要はない。この機能が日常的な場面で発揮される際には、危険な変化以外の「変」一般にも、さらには判断結果が好ましい変化にも機能が拡張されていると考える方が、例えば「流行」やそれに関わる「好奇心」などを考える視点からも、いっそう現実的で妥当だと考える。

また、LeDoux (1996) は、視覚情報が無意識のうちに処理され危険と評価された結果、恐怖反応とともに意識化するの「扁桃体」の働きによると考える。他方危険でない情報

に関しては、長期記憶とワーキングメモリーの結合によって意識できるようになる、と消極的に述べるにとどまっている。しかし我々は、危険ではないと評価された場合でも、「新奇」と評価されれば、一時的にせよ、ほぼ否応なく対象を意識し注意を向けてしまう。我々が無意識のうちに多くの情報を処理していることについては同じ意見であるが、新奇な情報が危険でないと評価された後の仕組みについては、扁桃体の関与についてもその程度を含めて再検討する余地がある。

以上の知見をあわせて考えると、詳細について未知の部分は残るものの、この感覚は五感と同じく、まず、変化を知らせる感覚と考えることができる。変化のない状態を常の状態と考えるならば、非常を知らせる感覚と云う。知らせる変化は自己のものも周界のものもある。我々を取りまく自然や周界が厳密には無変化であり得ないことを考えあわせれば、感じ取れた変化は相対的に、あるいは主観的に大きな変化量のものであり、この感覚についても、例えばリベットたちが見いだした0.5秒が示唆するように、閾値の存在する可能性がある。

また変化が認知されるためには、その前に変化のない状態との比較がおこなわれていなければならない。少なくとも「変」という感覚については、比較する対象は変化する前の常態 (ふつうの状態) であり、眼前の状態がすでに変化していることから、必然的に記憶との比較になる。

さらにこの過程は自覚する前におこなわれていなければならない。すなわち「変」という感覚は、「ふつう」の記憶との無意識での比較結果に基づく違和感と云う。無意識での比較という仮定は、当初、「変」という感覚に固有の特徴と思われた (石井, 2005)。しか

し、上にも紹介したとおり、昨今の諸研究 (Gregg, Seibt, & Banaji, 2006; Nørretranders, 1998; Wilson, 2002) は無意識での比較過程の存在を示しており、これに従うならば「変」という感覚だけではなく五感も、その結果が意識に上る際の感覚と考えることができる。また、逆説的に言えば、「変」という感覚は、五感と同じく、無意識の情報処理過程の存在を前提として初めて理解できる感覚と言っている。

この感覚はまた五感と同じく、感じ続けることによって、我々に精神的負荷あるいは精神的疲労をもたらす。同時にその一方で慣れてしまうこともあるようである。石井 (未発表) では実験参加者に左右異なる靴下をはくことで、非常識に対する自他の反応を観察するように依頼した。依頼に応じた43名の事例報告には「緊張した」、「恥ずかしかった」、「疲れた」という報告の一方で、約4週間の実施期間の後半になるにつれて「気にならなくなった」、「慣れた」という報告も多く見られるようになった。

このように五感と同じと思われる特徴がいくつもある一方で、「変」という感覚が五感とは異なる点として、まず、この感覚が五感についても感じる、いわゆるメタ感覚だという点がある。自身の変化についても我々は例えば「変な」痛みを識別できる。またこのことは同時に、五感と異なり「変」という感覚が、痛覚に対する「痛み」や嗅覚に対する「におい」などのような、対応する固有の身体感覚を持たないことを示す。したがって文字通り「変調」を告げる感覚としか表現できなくなる。しかしその基準は明確であり、比較対象は様々な「ふつう」の感覚である。

その中には、「変」という感覚固有の特徴として、「みんなと同じ (common)」であること

を基準として「ふつう」の記憶と比較し、その結果感じる違和感という特徴も含まれている。このような感覚の社会性は、五感について日常的に経験することは少ない。例えば視覚に対して感じる「変」という感覚は、多くの場合先のメタ感覚としての特徴であり、見え方が変だという判断に従って専門家の診断を仰ぐことになる。他方、視覚によってもたらされた内容が「変」だという場合、その「変」な対象が自己の場合も周界の場合も、すでに記憶との比較を含めた結果の判断や評価を指した感覚になっており、視覚固有の特徴からは分けた方がよいと考える。

「変」という感覚はその比較対象である「ふつう」の感覚との関係において、4種を想定することができる。すなわち我々は自己と周界に対して、「いつもどおり (ordinary)」と「みんなと同じ (common)」という2種類の「ふつう」について絶えず吟味している。この4種の「ふつう」という感覚を自覚する機会は、それぞれが対応する「変」という感覚以上に少ない。しかしひとたび自己の判断と周界の判断が食い違った時には、多くの場合、「変」の場合でも「ふつう」の場合でも、周界の判断が優位になるという意味において、この感覚はもう一つの社会性を有している。食い違いに際して周界の判断が優先される現象は、外出時の着衣の乱れなどのように、日常的に観察される。この現象が、例えば多数派と少数派の対立のように劇的な場面で現れるときには、エスノメソドロジーの研究者が何度も指摘するように「常識の弊害」と呼ばれることになる。

次に、「変」という感覚のこのような検討を通じて見えてくる意識化の過程を整理する。その際、無意識における比較過程に「活性化レベル」と「顕在化レベル」という概念を新

たに用いる。活性化レベルという概念で想定するのは、情報を比較処理する過程の文字通り活性化の程度である。処理している刺激あるいは情報の強度と持続時間の積で表せると考える。リベットたちの実験で用いられていた準備電位の高さはここで言う活性化レベルの指標の一つである。同様の概念は、記憶研究における活性化拡散理論においても中心的な役割をもって用いられている。より一般的には喚起水準 (arousal level) という表現で、広く用いられている概念と同様のものを想定する。この活性化レベルが自覚される水準 (高さ) が顕在化レベルである。「変」という感覚について想定した閾値がこれに当たる。この顕在化レベルも固定した高さがあると考えよりも、治安に関わる周界の緊張度や体調によって、あるいは本人の欲求や動機付け、周界のマナーリ度によって、変化すると考える方が妥当であろう。我々は誰もが、我が身や周界の変化に時に敏感になり、時に鈍感になる。

先にも述べたとおり、Wilson (2002) によれば、我々の五感あらゆる瞬間に千百万要素以上の情報を取り入れている (訳書 p.33.1.1-9.)。その中で意識的に処理できるのは1秒あたりせいぜい40要素の情報だと言う。残る1秒あたり10,999,960要素の情報の処理が無意識の処理過程で行われていることになる。数の正確さはともかく、意識できないところで膨大な情報処理が行われていることは、例えばStafford & Webb (2004) にも繰り返し示されており、現在取えて異を唱える知見はないと考える。その一部で眼前の状況と記憶との比較照合が行われている可能性もなしとしない。その結果顕在化レベルを超える変化が見いだされたとき、我々が自覚する感覚が「変」と言っている。その後の確認過程と反応は先に

述べたとおりである。

では最後に、このような感覚を多くの人にほぼ同時に抱かせることは可能であろうか。本稿では、少なくとも結果的に可能だと考える。その根拠は、一つには、学習によって既に我々の無意識のうちに形成された社会のひな形の存在であり、二つには、特に大量生産と大量消費を基礎とした経済活動の中で成功してきた広告産業の事例が挙げられる。生活必需品が基本的にそろった社会でなお大量生産と大量消費を維持するためには、商品の「買い換え」を勧めるのが日常的に可能な範囲で最も有効な方法である。身近な例としてのコマーシャルは、日々様々な望ましい「変」を提示することで、視聴者の耳目を引き、「新しい生活」へと誘導する (石井, 2001)。マスメディアを通じた広告活動は、同じ感覚を多くの人にほぼ同時に抱かせることを本来の目的としており、これは明らかに社会的現実を形成し変更するための強力な手段である。

コマーシャルや広告の作り手はたいいていの場合、想定される消費者の、内なる社会のひな形にプラス・アルファを付加した内容を新製品として提示する。ここで言うプラス・アルファとは、例えば、洗濯機の洗濯槽の「斜め化」であったり、不明確な基準ながら「ひと味違う」その味であったり、内容にどのくらいの違いがあるのかよく分からないままの「地デジ」であったりする。改良あるいは変更されているのは既存の事物や事象のごく一部でなければならない。内なる社会に大きな変更をもたらすような大きな、したがって劇的な変更は、明らかに視聴者や消費者の反発と拒否を招く。例えば携帯電話は車載型に始まって肩提げ型、ポーチ型 (腰吊り型)、そして手のひらに載るタイプへとという具合に、据え置き形の電話のイメージを徐々に脱して、現在

の形態になった。関連技術の進歩と普及も関わっているものの、売り出すタイミングに対する売り手の思惑も大きく絡んでいることは周知の事実であろう。

実際の変更はごく一部でありながら新製品は、コマーシャルや広告として提示される際にはそれがすべてであるかのような扱いを受ける。表現の誇張は視聴者の耳目を引くためであり、視聴者の側もそれを割り引いて対象を眺め、評価する。その結果、数多くのコマーシャルや広告のうち、視聴者に「望ましい変」と映ったものはヒットし、「望ましくない変」と映ったものは物議を醸す。ここに「変」という個人的な、かつ内なる感覚にしたがって、ほぼ同時に不特定多数が動いたり動きを止めたりする事態が起こる。他方「変」と映らない大多数のコマーシャルや広告は、認知的不協和理論 (Festinger, 1957) が明らかにしたとおり、自覚されないまま、周界の安定 (無変化) を示すものとして安心を与えつつ読み捨てられ、聞き捨てられ、それによって循環的に、周界の安定を維持している。

このように社会的現実の維持あるいは変更について、「変」という感覚はまず無意識と意識の接点として、そして同時に個人と周界あるいは集合の接点として、重要な位置の一つを占めると考えられる。しかしこの感覚を巡る過程は、変化への動機付けと例えば現状維持のバイアス (Stafford & Webb, 2004)、さらに変化への動機付けという三者の個人内のバランスや集合的バランスの問題など、興味深い課題を多く残したまま、まだ詳細な、そして実証的な探求を今後の課題として残している。

引用文献

Festinger, L. (1957) *A theory of cognitive dis-*

sonance. Row, Peterson and Company. (フェスティンガー, L. 末永俊郎 (監訳) (1965). 認知的不協和の理論 —社会心理学序説— 誠信書房)

Fox, M.W. (1974). *Concepts in ethology: Animal and human behavior*. University of Minnesota Press, Minneapolis. (フォックス, M.W. 今泉吉晴 (訳) (1990). 行動学の可能性 —動物とヒトの行動— 思索社)

Garfinkel, H. (1963). A conception of, and experiments with, “trust” as a condition of stable concerted actions. In O. J. Harvey (Ed.) *Motivation and Social Interaction: Cognitive Determinants* (187-238), Ronald Press, New York .

Gregg, A. P., Seibt, B., & Banaji, M. R. (2006). Easier done than undone: Asymmetry in the malleability of implicit preferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90** (1), 1-20.

池田謙一 (1993). 社会のイメージの心理学 —ぼくらのリアリティはどう形成されるか— セレクション社会心理学5 サイエンス社 (Ikeda, K.)

池田謙一 (2000). コミュニケーション 社会科学の理論とモデル5 東京大学出版会 (Ikeda, K.)

池上知子 (2001). 自動的処理・統制的処理 —意識と無意識の社会心理学— 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 (著) 「社会的認知の心理学 —社会を描く心のはたらき—」第5章 130-151. (Ikegami, T.)

石井 徹 (2001). 企業の販売戦略にみる受け入れ可能な生活変化量；常識変容メカニズムに関する一考察 島根大学法文学部 紀要社会システム学科編 (経済科学論集) **5**, 1-28. (Ishii, T.)

石井 徹 (2005). 常識の規範的影響について (特別論文) 社会心理学研究, **20** (3), 224-252. (Ishii, T. (2005). A study of the normative influence of common sense. *Japanese Journal of Social Psychology*, **20** (3), 224-252.)

石井 徹 (未発表). 「変な靴下」実験：事例報告 (Ishii, T.)

LeDoux, J. (1996). *The emotional brain: The mysterious underpinnings of emotional life*. New York: Simon and Schuster. (ルドゥ, J. 松本元・川村光毅・木幡邦彦・石塚典生・湯浅茂樹 (訳) (2003) エモーショナル・ブレイン 情動の脳科学 東京大学出版会)

Lorenz, K. (1960). *Er redete mit dem Vieh, den Vögeln und den Fischen*. (ローレンツ, K. 日高敏隆 (訳) (1970). ソロモンの指環 早川書房)

Nørretranders, T. (1998). *The user illusion: Cutting consciousness down to size*. trans. J. Sydenham. New York.: Viking. (ノーレットランダーシュ, T. 柴田裕之 (訳) (2002). ユーザー・イリュージョン —意識という幻想— 紀伊國屋書店)

Prentice, D. A. & Miller, D. T. (1993) Pluralistic ignorance and alcohol use on campus: Some consequences of misperceiving the social norm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64** (2), 243-256.

Schutz, A. (1945). On multiple realities. *Philosophical and Phenomenological Research*, **4**, 533-575.

Stafford, T. & Webb, M. (2004). *Mind hacks*. O'Reilly Media Inc. (スタフォード, T. ウェブ, M. (2005). 夏目大 (訳) MIND HACKS 実験で知る脳と心のシステム オ

ライリー・ジャパン)

Wilson, T. D. (2002). *Strangers to ourselves: Discovering the adaptive unconscious*. The Belknap Press of Harvard University Press. (ウィルソン, T.D. 村田光二 (監訳) (2005). 自分を知り、自分を変える：適応的無意識の心理学 新曜社.)